

生物研究

第 XVII 卷 第 3・4 号

1973

(終卷記念号)

THE LIFE STUDY

Vol. XVII, Nos. 3・4

(Final Issue)

December 25, 1973

FUKUI, JAPAN

目 次

報 文

台湾産アナバチ科の研究 (XV) (英文)	常 木 勝 次 ... (39)
マメギングチバチの習性	田 本 正 ... (50)
樹脂を使用するキュビギングチバチの習性	南 部 敏 明 ... (55)
トゲアシギングチバチについての観察	山 田 晴 昭 ... (61)
カヤの髓に造られたヒメコシボソバチ類の巢 (英文)	常 前 勝 次 ... (63)
トモンハナバチの巢の1例	木 田 泰 生 ... (74)
ニッポンジガバチモドキの巢	田 本 正 ... (77)
フクモンアシナガバチの多産巣例の発見 (英文)	山 根 正 氣 ... (79)
スズメバチ属ハチ類のコロニー内の分業。Ⅲ。外役活動	松 浦 誠 ... (81)
奄美群島の蜂類	室 田 忠 男 ... (100)
常木教授採集朝鮮産広腰亜目の蜂類 (英文)	富 樫 次 郎 ... (103)
アナバチ科2種の学名変更 (英文)	常 木 勝 次 ... (113)
1972年台湾で採集した蜂類	室 田 忠 男 ... (115)
山梨県のアナバチ科 (第1報)	須 田 博 久 ... (121)
有刺類の行動等について	宮 野 正 雄 ... (125)
日野山のソボツチスガリの巢	常 木 勝 次 ... (127)
カギバラバチ類の採集	常 木 勝 次 ... (128)

採 集 行

山梨県ハチ類採集コース	須 田 博 久 ... (131)
-------------------	-------------------

研 究 手 引

蜂類研究手引 (32)。日本産キマグラハナバチ属	常 木 勝 次 ... (135)
--------------------------------	-------------------

短 報

銀口蜂関係学名変更 (49)。 筒巢に寄生したヒメバチ (49)。 ウスキギングチ福井県から初記録 (54)。 ジガバチモドキ検索表の訂正 (54)。 日本産ジガバチモドキへの追加 (54)。 キュビギングチ福井県第2の記録。 岩手・秋田県で採集したアナバチ科 (76, 南部)。 ガロアシギングチとニッコウギングチ (77, 78)。 モウソウクマオナガゴバチの習性 (99, 富樫)。 マルバツツハナバチの巣 (112)。 サッポロジガバチモドキ福井県で発見 (113)。 スミスハムシドロバチの巣 (114)。 ツマアカツチバチを福井県で採集 (120)。 フジジガバチの福井県内新産地 (120)。 スギハラギングチについて (126)。 オクネギングチについて (130)。 エノマエダテの学名変更 (134)。 トゲアシギングチについて (150)。 ジガバチモドキの獲物 (150)。 埼玉県のアナバチ科 (150, 南部)。 フクジスズバチの巣 (150)。

CONTENTS

K. Tsuneki: Studies on the Formosan Sphecidae (XV)	(39)
T. Tano: Nesting biology of <i>Entomognathus brevis</i> Linden observed in Japan	(50)
T. Nambu: Biology of <i>Crossocerus (Towada) flavitarsus</i> Tsuneki, using resin to close the nest entrance	(55)
H. Yamada: Some observations on nesting habits of <i>Crossocerus denticrus</i> H.-S.	(61)
K. Tsuneki: Nests of some Pemphredonine wasps in the pith of <i>Miscanthus</i>	(63)
Y. Maeta: A nest of <i>Antidium septemspinorum</i> Lep.	(74)
T. Tano: A nest of <i>Trypoxylon nipponicum</i> Tsuneki	(77)
S. Yamane: Discovery of a pleometrotic association in <i>Polistes chinensis antennalis</i> Per.	(79)
M. Matsuura: Intracolony polyethism in <i>Vespa</i> . III. Foraging activities	(81)
T. Murota: Some aculeate Hymenoptera collected in the Amami group of the Ryukyus	(100)
I. Togashi: Tenthredinoidea of Korea collected by Prof. K. Tsuneki in 1941-43	(103)
K. Tsuneki: Taxonomic notes on two species of Sphecidae	(113)
T. Murota: Sphecidae, Mutillidae, Scoliidae and Chrysididae collected in Formosa in 1972	(115)
H. Suda: Sphecidae of Yananashi Pref., Japan	(121)
K. Tsuneki: A nest of <i>Cerceris sobo</i> on Mt. Hino, Fukui	(127)
K. Tsuneki: On Trigonaloida of Japan	(128)
K. Tsuneki: A guide to the study of the Japanese Hymenoptera (32). The genus <i>Nomada</i> Scopoli	(135)

middle metatarsus not modified, hind tibia and tarsus more strongly incrassate than in ♀, with the spinules on the former less in number (usually only 2 visible).

Specimens examined: 4 ♀ 2 ♂ from Nantou Pref. (Sunkan-Tsuifeng, 2000-2400 m.)

銀口蜂関係学名変更

(1) 亜属 *Coelocrabro* を *Blepharipus* に改める。

最近 Leclercq は米の Menke らの示唆によってこの亜属の再検討を行なった結果, そのタイプは従来考えられていたケブカギングチ *Crossocerus pubescens* (Shuckard) ではなく, *Crossocerus nigritus* Lepeletier et Brullé であることがわかった。C. *pubescens* に *Coelocrabro* の名を与えたのは, Thomson (1870) であるから, *nigritus* の *Blepharipus* Lepeletier et Brullé (1835) のほうが先行するので, *Coelocrabro* は廃止されその代りに *Blepharipus* が使われることになる。ではこれまで *Blepharipus* 亜属とされていたガガンボギングチ *Crossocerus vagabundus* はどうなるのかというと,

(2) 亜属 *Blepharipus* を *Acanthocrabro* に改める。

Acanthocrabro Perkins (1913) は, 英国ではガガンボギングチの亜属名として使われていたが, これが正式に *Blepharipus* の抜けた穴を埋めることになる。*Acanthocrabro* はトゲギングチの意で前腿基部下面にある棘に基づく。日本の *yamatonicus* にはこのトゲはないからピンと来ないが, やはり *Crossocerus* (*Acanthocrabro*) *vagabundus yamatonicus* Tsuneki と呼ぶことになる。

(3) 上記の(1)によるとアムールギングチは, *Blepharipus* 亜属になるわけであるが, これは大顎と第1腹節の特徴から, 最近南米の種をもとにして創設された亜属 *Neoblepharipus* Leclercq, 19 に入れられることになった。最近の論文で Leclercq は私が台湾の *quinquedentatus* Tsuneki をタイプとして創設した亜属 *Fentis* (1971) をこの synonym としている。*Fentis* には腹部に明瞭な黄紋があり, 尾域の特徴も多少違うのであるが, 彼は同様なものを極最近欧州からも発見し旧北区に上記のものを含めて3種の *Neoblepharipus* がいるとしているので, 一応彼に従っておくことにした。従ってアムールギングチの学名は今後 *Crossocerus* (*Neoblepharipus*) *amurensis* (Kohl, 1915) となる。

(4) ハトガユギングチは初め欧州の *congener* (Dahlbom) と同じものと考えられていたが, 文献を精査の結果多少の差異があるので, 私はこれを亜種 *fukuianus* に分けた。ところがその後 Leclercq が欧州で極めて稀種の *congener* の♀標本を1頭送ってくれたので, 直接比較したところ, 中節の構造その他にかなりの違いがあり, 別種とするのが妥当と考えられるので, *fukuianus* を格上げして種の rank に入れた。それで, ハトガユギングチは, 今後は *Crossocerus* (*Ablepharipus*) *fukuianus* Tsuneki と呼ばれることになった。

(5) トワダギングチはキユビギングチの雌

本誌に南部さんが発表しているように, 幼虫飼育の結果トワダギングチの巣からキユビの♀が出現したので, 両者は同一種ということが明らかになり, その結果キユビのほうに先取権があるので, トワダの名は種小名の *leclercqi* と共に消えることになった。しかしその特徴は亜属として扱うのに十分なので, キユビの学名は *Crossocerus* (*Towada*) *flarvitarisus* (Tsuneki, 1947) で示すことになる。 (常木)

筒巢に寄生したヒメバチ

オオジガバチモドキの巣と, フタスジズバチの巣から *Pimpla hokkaidonis* Uchida が, またオオジガバチモドキの巣から *Dihelus hylaeovor* Momoi が現れた。同定下った桃井節也博士に謝意を表す。 (常木)